

福井県坂井市三国町安島方言の三型アクセント： 付属語のアクセントと型の中和

著者	松倉 昂平
雑誌名	国立国語研究所論集
号	14
ページ	99-123
発行年	2018-01
URL	http://doi.org/10.15084/00001415

福井県坂井市三国町安島方言の三型アクセント

——付属語のアクセントと型の中和——

松倉昂平

東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程／国立国語研究所 共同研究員

要旨

福井県坂井市三国町安島方言は、語の長さにかかわらず常に3つの型が区別される三型アクセント体系を有する。本稿ではまず、安島方言において区別される3つの型（A型、B型、C型）それぞれがどのようなピッチパターンをもって実現するかを詳細に記述する。続いて、助詞・助動詞等のアクセント上の振舞いを取り上げ、自立語に後続する助詞・助動詞の種類によって文節全体の音調と型の中和パターンが大きく変わる現象を記述する。例えば、2音節名詞に助詞「ナラ」が付いた場合は3つの型が全て対立するが、助詞「ドマ」が付くとA型とB型が中和し、「ヤロ」が付いた場合はB型とC型が中和する。最後に、A、B、C各型の音韻論的な解釈を試み、本稿では、2種の式音調と下げ核の有無の組合せにより3つの型が区別されるという解釈案を提示する*。

キーワード：三型アクセント、安島方言、中和、付属語のアクセント

1. 坂井市三国町安島の概況

福井県坂井市三国町（旧坂井郡三国町）は、福井県の最北部に位置し、人口21,738人（旧三国町域の人口。2017年1月1日時点）を擁する日本海に面した港町である。福井市中心部からは北へ約20kmの距離にある。中心市街地は福井平野を流れる九頭竜川の河口に面し、往時は北前船の寄港地として栄えた。

三国町安島（あんとう）は、三国町中心部から北西へ4km離れた海岸沿いに位置する人口約1,000人の漁村である。現在の安島地区は名勝東尋坊を擁する開けた観光地であるが、かつては厳しい海岸地形により周辺から隔離された交通の不便な地域であった。

わずか4kmほどしか離れていないにもかかわらず、三国町中心部方言（以下、三国町方言）と安島方言はしばしば通じにくいほどに大きく異なる¹。その相違は主に、安島方言の分節音が

* 本稿は2016年9月に行われた国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」音声研究班第1回研究発表会での口頭発表（題目「福井県三国町安島方言におけるアクセントの中和」）を踏まえ、内容の修正・追加を行ったものであり、本プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（プロジェクトリーダー：窪園晴夫）の研究成果である。また、科研費基盤研究（C）「福井三型アクセントの調査研究」（16K02722、研究代表者：新田哲夫）及び特別研究員奨励費「言語地理学と比較再建に基づく福井・石川両県のアクセントの記述的・通時的研究」（16J03745）の助成を受けている。

現地調査に際しては、調査にご同行頂いた新田哲夫先生、松森晶子先生より多くのご助力を頂きました。また英文要旨に関しては小林正人先生、Nishaant Choksi氏よりご助言を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。本稿のデータ・内容に誤りがあればそれは筆者の責任です。最後に、長時間に及ぶ調査にご協力くださいました話者の皆様、並びに協力者の方々をご紹介くださいました坂井市雄島公民館の皆様にも厚く御礼申し上げます。

¹ かつては三国町中心部から安島に嫁入りすると姑や舅の言葉がほとんど理解できないものだったと聞く。安島地区が独特の方言を持つことは町内外でよく知られており、例えば三国町から離れた福井市内でも、近隣に独特の方言を持つ地域・集落はあるかという問いに対して安島の名が挙がるものがしばしばある。

経た大胆な音韻変化に起因するが、アクセントの面でも三国町方言とは大きく異なることが明らかになっている。

2. 先行研究と本稿との関連

2.1 三国町方言のアクセントについて

安島方言に隣接する三国町方言のアクセントに関しては、金田一（1975）や佐藤（1983, 1988）によって1～3拍までの短い語の音調が明らかになっている。金田一（1975: 234-235）によれば1～3拍語には次のような2つの型がある（○は低、●は高）。

(1) 音調型 語例

- 「秋」「蚊が」…
- 「足」「葉が」…
- 「兜」「秋が」…
- 「命」「足が」…

佐藤（1983, 1988）もまた複数の高年層話者との調査で2拍名詞に（1）とほぼ同様の2つの型が対立する体系を見出し、これを「三国式アクセント」と呼んだ。福井市成願寺町方言（山口1984a）、あわら市清滝方言（松倉2015）など福井平野周辺各地に分布が確認されている二型アクセントとほぼ同質の体系と見られる。

2.2 安島方言の分節音について

安島方言は、狭母音の脱落や、またそれに伴う子音の変化・延長といった独自の音韻変化を多く経ている。新田（2011）は、特に本土方言では珍しい特徴として、*maffa*「枕」、*ssoi*「白い」等の重子音を生じる音韻現象を報告し、標準語形や歴史的に対応する形との対応関係を整理し一連の重子音の成立過程を考察した。

(2) 標準語と安島方言重子音の対応例（新田(2011: 15)より一部引用）

- kura* || *ffa* : *ffa*「葎」、*maffa*「枕」
- kuro* || *ffo* : *ffo*「黒」、*ffoi*「黒い」、*tebuffo*「手袋」
- kuwa* || *ffa* : *ffa*「桑、鋤」、*iffa*「行くワ」（行く＋終助詞ワ）
- siro* || *sso* : *sso*「白」、*ssoi*「白い」、*usso*「後ろ」

その他の特徴としては、カンナリ「雷」、ナンダ「涙」、ドクダン「どくだみ」、カガン「鏡」など語中・語末のミがある程度規則的に撥音化する現象が挙げられる。前述の重子音化とは、狭母音の脱落によって音節数が減じるという共通点を持つ。

本稿では、*ffa*「葎」等の語頭に重子音を持つ語がアクセント上どのように振舞うかについても触れる（3.4参照）。

2.3 安島方言のアクセントについて

従来、本土諸方言の三型アクセントとしては隠岐諸島の三型アクセントが唯一知られてきたが、近年になって、福井県越前町沿岸部（新田 2012）や福井県あわら市沿岸部（松倉 2014）など福井県の沿岸各地にも三型アクセントが分布することが相次いで報告されている。松倉・新田（2016）はこれらの報告を受け、それぞれに表面上の音調が大きく異なる3方言（越前町厨方言、あわら市北潟方言、そして坂井市三国町安島方言）の三型アクセントを取り上げ、その基本的な共時的特性（基本的な音調、動詞活用形や複合名詞のアクセントなど）の記述・対照を行った。松倉・新田（2016）によれば、安島方言の1～4音節名詞は（3）（4）に挙げるような音調を持つ。

（3） 三国町安島方言の1～4音節名詞言い切り形（松倉・新田 2016: 84）

- A [蚊一。 ニ[ワ。 [サ]カ[ナ。 カ[ミ]ナ[リ。
 B [葉一。 [ヤ!マ。 コ[コ!ロ。 ア[サガ!オ。
 C [芽一。 [マ]ド。 ハ[タ]ケ。 ア[マザ]ケ。

なお直後に別の語が続く環境（接続形）では言い切り形と若干異なる音調を取るといふ。

（4） 三国町安島方言の1～4音節名詞接続形（松倉・新田 2016: 84）

- A [蚊一]… ニ[ワ]… [サ]カナ… カ[ミ]ナリ…
 B [葉一]… [ヤ]マ… コ[コ]ロ… ア[サガ]オ…
 C [芽一]… [マ]ド… ハ[タ]ケ… ア[マザ]ケ…

]はピッチの大きな下降、!は小さな下降、[は上昇を表す。なお、安島方言において区別される3つの型は先行研究と同じく本稿でもそれぞれA型、B型、C型と呼称する。

松倉・新田（2016）では、一度に3つの方言を扱っている上、動詞活用形や複合名詞など取り上げるテーマが多いために、個別の方言の基本的な音調に対する解説が最小限に抑えられている。安島方言の各型の音声実現に関する記述もほぼ上記の（3）（4）とその解説部分に限られているが、依然として、この方言の複雑な音調の実態が十分に明らかにされているとは言えない。実際には、各型ともに全ての発話が（3）（4）の通りに実現するとは限らず、表面上の音調は実に多様で複雑なバリエーションを見せる。本稿では、前稿（松倉・新田 2016）で示されたごく基本的な体系の枠組みを踏まえつつ、各型のピッチパターンについてより詳細な記述を行い、前稿に対する補足を加える。

3. 音調型一覧

本節では、名詞の音調を中心に取り上げ、A、B、C各型が様々な環境においてどのような音調で実現するかを一覧する。

本稿の記述は安島出身・在住の1942年生女性話者の調査に基づく²。調査は2014年8月から

² 他に同世代の2名の話者（1941年生女性2名）とも一部同じ内容の調査を行い個人差の程度を確認した。どの話者にも本稿で記述する体系の基本的な枠組みは共有されていると見られる。

2017年5月の間に計10回のべ約18時間にわたり行われた。話者による調査票の読み上げを聴き取る方法を中心に、適宜話者の内省報告を得ながら調査を行った。

なお分節音の簡易表記には原則片仮名を用いるが、語頭に来る無声の重子音については ffa《蔵》のように簡易的な発音記号としてアルファベットを併用する。語中のガ行子音は鼻音[n]であるが、語頭の破裂音[g]と特に表記を分けずガ、ギ、グ、…と表記する。以下本稿では音調記号として]…大きな下降, !…小さな下降, […上昇の他, ○]]…音節内下降を用いる。

3.1 文節性と系列化

1つ1つの型について詳述する前に、(5)に1～4音節名詞とそれらに1～3音節の助詞が付いた文節の言い切り形の音調を一覧し、全ての型で「文節性」と「系列化」が成り立つことをまず示す。なお安島方言のアクセント上の長さを数える単位は基本的に音節であるが、1音節語の場合はその音節構造もまた音調実現に関与する(3.4参照)。

(5) 1～4音節名詞(+助詞ガ/ヨリ/ヨリモ)言い切り形(μ :モーラ, σ :音節)

	1 μ	1 σ 2 μ	2 σ	3 σ	4 σ	5 σ
1A	[カ。	[カー。	カ[ガ。	[カ]ヨ[リ。	カ[ヨ]リ[モ。	(蚊)
2A			ニ[ワ。	[ニ]ワ[ガ。	ニ[ワ]ヨ[リ。	ニ[ワヨ]リ[モ。
3A				[サ]カ[ナ。	サ[カ]ナ[ガ。	サ[カナ]ヨ[リ。
4A					ニ[ワ]ト[リ。	ニ[ワト]リ[ガ。
1B	[ハ。	[ハー。	[ハ!ガ。	ハ[ヨ!リ。	ハ[ヨリ!モ。	(葉)
2B			[ヤ!マ。	ヤ[マ!ガ。	ヤ[マヨ!リ。	ヤ[マヨリ!モ。
3B				コ[コ!ロ。	コ[コロ!ガ。	コ[コロヨ!リ。
4B					ア[サガ!オ。	ア[サガオ!ガ。
1C	[メ。	[メ]ー。	[メ]ガ。	メ[ヨ]リ。	メ[ヨリ]モ。	(芽)
2C			[マ]ド。	マ[ド]ガ。	マ[ドヨ]リ。	マ[ドヨリ]モ。
3C				ハ[タ]ケ。	ハ[タケ]ガ。	ハ[タケヨ]リ。
4C					ア[マザ]ケ。	ア[マザケ]ガ。

1拍名詞は1モーラ分の長さを持つ形(短形)と2モーラ分の長さに長呼される形(長形)の2つの実現形を持つ。短形ではどの型の語も高く短く発音され区別が現れないが、長形では音節内部の下降の有無でA、B型とC型が対立する。

語または文節の長さが2音節以上であれば3つの型の対立が現れる。末尾2音節以内において、A型は上昇(…○[○])が生じ、B型は小さな下降(…○!○)が生じ、C型は大きな下降(…○)○)が生じるようである。3音節以上のA型は次末音節が低まる重起伏調を持ち、B、C型はともに次末音節の直後に下降を生じるが下降幅の違いで区別される。

助詞を含む文節全体で自立語(名詞)のアクセントが実現する「文節性」が多くの助詞につい

て成り立ち、文節性が成り立つ場合には、全ての型で「系列化³」もまた成り立つ。助詞など付属語の振舞いについては 3.5 を参照。

3.2 A 型のバリエーション

3.2.1 1, 2 音節 A 型の接続形

1, 2 音節 A 型は接続形において後続する文節との間に必ず下降を生じる（例:[カー]デル「蚊出る」, カ[ガ]デル「蚊が出る」）。

3.2.2 3 音節以上の A 型のバリエーション

3 音節以上の A 型は特にバリエーションの幅が広い。3 音節 A 型は単独言い切り形の場合(6)のようなバリエーションで実現しうる。

(6) [サ]カナ = [サ!カナ > [サカナ > [サ]カ[ナ （単独言い切り形での頻度順）

[○]○○及び[○!○○はあらゆる環境に現れ、単独言い切り形においても最も実現頻度が高い型である。[○○○は非文頭環境には現れず、文頭の接続形によく現れる。逆に[○]○[○は言い切り形でのみ聴かれる型で、典型的には他の語に後続する文末環境に現れる。このように[○○○と[○]○[○の実現はその語・文節が置かれる環境による制限を受ける。

(7) 3 音節 A 型の環境別バリエーション

単独言い切り形	文頭接続形	非文頭言い切り形
[○]○○。	[○]○○…	…[○]○○。
[○!○○。	[○!○○…	…[○!○○。
[○○○。	[○○○ ⁴ …	
[○]○[○。		…[○]○[○。

なお 4 音節 A 型にも 3 音節の場合と全く同様に 4 通りのバリエーション（サ[カ]ナガ～サ[カ!ナガ～サ[カナガ～サ[カ]ナ[ガ]）が分布する。5 音節以上になると、*○[○○○○のような下降が生じない音調は聴かれない。

3 音節以上の A 型において、頻度の上では[○]○○, ○[○]○○や[○!○○, ○[○!○○が最もよく聴かれる音調であるにもかかわらず、前稿（松倉・新田 2016）や（5）で[○]○[○, ○[○]○[○等の重起伏調を A 型の代表型として挙げた背景には、これらの重起伏調が他の全てのバリエーションの基本となる一すなわち[○]○[○や○[○]○[○が通時的に最も古い音調で、これをもとに他の型が派生した一という解釈がある。

³「p 拍の自立語（名詞）に q 拍の助詞類が付いた音調型は、同じ系列の (p+q) 拍名詞の音調型と同じになる」現象（上野 2012a: 48）。

⁴ 2 音節 A 型と異なり、後続する文節との境界に下降は生じない（例:[ニワガ]ル「庭がある (A+C)」, [ウメノエ]ダガモ]エ[ル「梅の枝が燃える (A+A+A)」）。

- (8) [サ]カ[ナ(HLH~HLM)] → [サ!カナ(HMM)] → [サカナ(HHH~MHH)](通時的な成立順)
→ [サ]カナ(HLL)

[○]○[○(HLH ~ HLM)]を基本として、末尾の再上昇が失われると[○]○○(HLL)が成立し、低音調が後続する中音調との同化を起こすと[○!○○(HMM)]が成立する。さらに（おそらくHMMから）語頭のHが順行的に拡張すると[○○○(HHH ~ MHH)]が成立する。一連の変化の動機は重起伏調の解消である⁵。なおいずれのバリエーションで実現したとしてもB, C型との対立が紛れることはない点、付け加えておきたい。

3.2.3 5音節以上のA型におけるピッチの上昇位置

5音節以上のA型では、ピッチの上昇位置が語頭音節の直後にはなく、前次末音節の直前まで後退したバリエーションがしばしば聴かれる（例：ニ[ワト]リ[ガ~ニワ[ト]リ[ガ]）。

- (9) 5音節A型のバリエーション

○[○○]○[○~○[○○!○○~○[○○]○○~○○[○]○[○~○○[○!○○~○○[○]○○]

3.3 B, C型のバリエーション

B, C型にもある程度の音声的な実現幅が認められるが、それがしばしばB, C両型の対立の中和につながってしまう点、他の型と決して紛れることはないA型のバリエーションとは異なる。本節では、そもそもB, C型それぞれの音調はどのような点に違いがあるのか、またどのような場合にB, C型の対立が紛れてしまうのかを述べる。

3.3.1 下降パターンと下降開始位置

(5)によれば、B型とC型の最も重要な違いは末尾音節にかけての下がり方で、B型は末尾音節にかけてやや小さな下降が生じ、C型は大きな下降が生じる。おおよその聴覚印象としてはこの記述で誤りではないものの、実際には単純な記号化が難しい微妙な音調差で対立するもので、一度その実態を詳述する必要があると思われる。図1に2, 3音節B, C型のピッチ曲線を示しながら各型の特徴を述べる。

⁵ 重起伏調(HLH)を解消する手段として松森(1993: 40)には「a. 一峰化」(HLH > HLL), 「b. 高平化」(HLH > HHH), 「c. ダウンステップ」(HLH > HHM)の3例が挙げられている。安島方言ではこれらの変化がほぼ同時多発的に進行し、変化前後の新旧両型が自由変異的な（一部条件異音的な）バリエーションとして共時的に併存している状態にあると見られる。

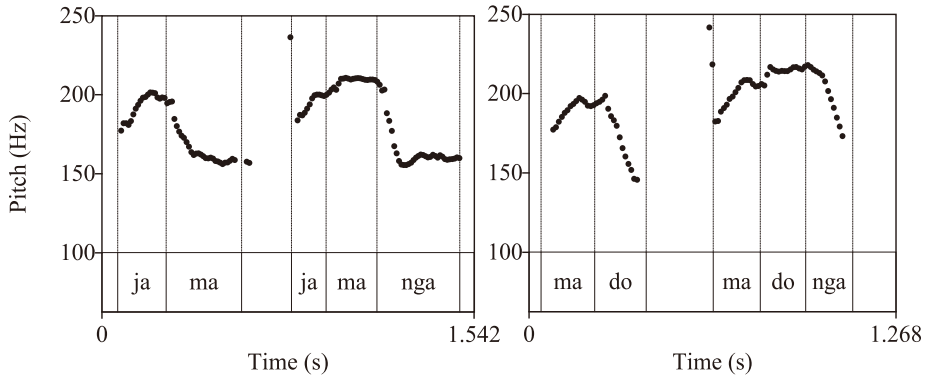


図1 B型：[ヤ!マ。ヤ[マ]ガ。(左) / C型：[マ]ド。マ[ド]ガ。(右)のピッチ曲線⁶ (ngは[n])

図1に見えるB、C型の違いは、下降開始のタイミングと、下降開始後の末尾音節内部におけるピッチの動向にある。B型は音節境界付近で一旦鋭い下降が生じるものの、末尾音節内部ではピッチの高さが一定以上に保たれる「下げ止まり」が見られる。C型は下降開始が末尾音節内部にずれ込み、なおかつ下降が末尾音節全体にわたり継続しB型のような高さの維持がない。

このピッチが完全に下がりきらないB型の「下げ止まり」が聴覚印象上の中音調を生み出すのであるが、上図の通り次末音節と末尾音節との境界に生じる下降自体は急激かつ下降幅の大きいもので、しばしば末尾音節が典型的な中音調(M)よりもかなり低くほとんど低(L)に聴かれ、C型の音調に紛れる場合がある。一方C型は下降がやや遅れる傾向があり、聴覚上も例えば2音節であれば[○]○]～[○○]]のようにはっきりと末尾音節内部への下降の後退が聴き取れる発話もある。B型では決してこのような下降の遅れは生じない。

(10) 2音節B、C型のバリエーション

B型：[○!○～[○]○

C型：[○]○～[○]○]]～[○○]]

なお(4)にも示された通り、2音節以上のB、C型は接続形においてしばしばその下降幅の対立を失ってしまう。ヤ[マ]ガ／マ[ド]ガといったB、C型の対立は言い切り形では安定して聴かれるものの、接続形ではほとんどの発話でヤ[マ]ガ…／マ[ド]ガ…のように区別が付きなくなる。ただし必ずしも接続形でB、C型の対立が中和するとは限らず、接続形でもヤ[マ]ガ…／マ[ド]ガ…のような区別が聴かれる場合はある。よってこれは音韻的なレベルでの型の中和というよりもむしろ、直後に他の語が続く環境(接続形)ではB、C型の微妙な音調差が実現しにくくなる(あるいは単に聴き取りにくくなる)という音声的なレベルでの混同であると見られる。

⁶ 図1、図2ともに1942年生女性による調査票読み上げの発音。音声分析にはPraat(ver 5.3.61)を用いた。

3.3.2 上昇位置

4音節以上のB、C型には、末尾音節にかけてのピッチの下降パターンの違いだけでなく、ピッチの上昇位置の違いもまた認められる。

(11) 4音節B、C型のバリエーション

B型：○[○○!○～○[○○]○～○○[○!○～○○[○]○]

C型：○[○○]○～○[○○○]

B、C型ともにピッチの上昇が語頭音節の直後に生じる発話（○[○○…）がよく聴かれるが、B型ではその上昇が遅れる発音がしばしば聴かれる（(11) 下線部）。ただしこの上昇の遅れも簡潔な表記が難しい音調で、○○[○]○(LLHL)のようなはっきりとした1音節卓立調よりも○[○]○(LMHL)のような漸次的な上昇に近く聴こえる場合が多い。一方C型ではこのような上昇の遅れは基本的に生じない。

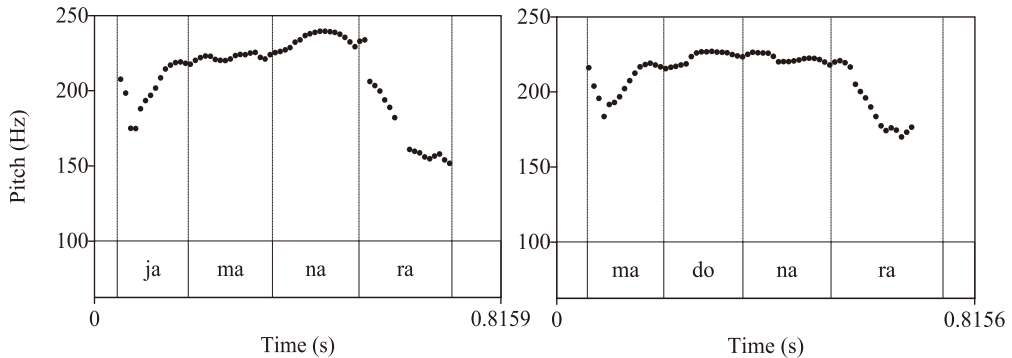


図2 B型：ヤ[マ[ナ]ラ。(左)／C型：マ[ドナ]ラ。(右)のピッチ曲線

図2のピッチ曲線を見ると、B型では1音節目内部のピッチの上昇のうち、2音節目から3音節目にかけても緩やかにピッチの上昇が続いている。一方C型には2音節目から3音節目にかけての上昇は見られない。

このような上昇位置の違いもまたB、C型を区別する手掛かりにはなるものの、弁別に寄与する特徴としてはあくまでも前項で述べた下降パターンの違いが決定的であると思われる。少なくとも本稿の話者の発話をこれまでの調査で観察してきた限り、B、C型の違いは、上昇位置の違いよりもやはり下降パターンの違いとして実現することが多い。その上、C型に○○[○]○のような上昇が遅れた発音が全く聴かれない訳でもないため、上昇位置の遅れだけを根拠にB型と断定することはできない。以上のことを踏まえ、本稿では特に必要がある場合を除き、B型において上昇が遅れる傾向を逐一音調表記に反映させることはしない方針を取る（例えば、ア[サガ]オに逐一アサ[ガ]オを併記することはしない）。

なお、ピッチの上昇位置に関しては、上昇が遅れる発話が聴かれるという点でB型はA型と共通する特徴を持つ（3.2.3参照）。

(12) A, B, C 各型の上昇位置のバリエーション⁷ (5 音節を例に)A 型: ニ[ワト]リ[ガ~ニワ[ト]リ[ガ~ニワ[ト]リガB 型: ア[サガオ!ガ~アサガ[オ!ガ~アサガ[オ!ガ 【上昇の遅れがしばしば生じる】

C 型: ア[マザケ]ガ(~アマザ[ケ]ガ ※比較的稀) 【上昇の遅れが基本的に生じない】

このような上昇位置に関する A, B 型と C 型の傾向の違いは, 3つの型の区別にとり余剰的な特徴ではあるが, 各型の音韻論的な解釈を考える際には, なぜこのような違いが生じるかに対しても説明を与える必要があるだろう (4.1 参照)。

3.4 音節構造とアクセント

安島方言のアクセント上の長さを構成する単位は音節である。すなわち, 一般に特殊拍と呼ばれる撥音・長音・促音に, 連母音 ai, oi, ui の第 2 母音 i 及び語中の無声化母音は, アクセント上の長さを数える単位, アクセントを担う単位としての独立性を基本的には持たない。

(13) 撥音・長音に終わる 2 音節 3 モーラ名詞の音調

音節構造: CV.CVN CV.CVV

A カ[ガン。 [カ]ガン[ガ。 (鏡)

B [ミ!カン。 ミ[カン!ガ。 [サ!トー。 サ[トー!ガ。 (蜜柑, 砂糖)

C [ハ]サン。 ハ[サン]ガ。 [ブ]ドー。 ブ[ドー]ガ。 (鉢, 葡萄)

続いて安島方言では語末に立たない促音・無声化母音を含む語例を示す。

(14) 促音・無声化母音を含む A 型語の音調 (下線部シが無声化)

2σ 3σ

促音 カッ[テ。 [ア]ガッ[タ。 (勝手, 上がった)

無声 アシ[タ。 [ワ]ラシ[タ。 (明日, 割らせた)

語中の無声化母音はアクセント上あたかもそれ単独では音節を形成しないかのような振舞いを見せる。上例アシタは「アシ」で 1 音節のように振舞い, 3 音節 A 型の音調 *ア_シタ (= [サ]カ[ナ]にはならない。

1 音節語の場合は, 1 拍名詞の短形・長形の違いに見たように, 音節の軽重などの音節構造によって型の中和パターンが変わる。

(15) 1 音節名詞の単独言い切り形

音節構造: CV CCV CVV CV.V

A [カ。 [ffa_offa_oŋa_o。 [ハイ。~ハ[イ。 (蚊, 鍬, 灰)B [ハ。 [ffa_o[ffa_oŋa_o。 [カイ。~[カ!イ。 (葉, 蔵, 貝)C [メ。 [ffo_o[ffo_oŋa_o。 [ダ]イ。 (芽, 黒, 台)

⁷ 上昇位置以外に関するバリエーションは一部省略する。

語頭に重子音を持つ *ffa* 「歛」などは語全体としては2モーラの長さを持つが、語頭の子音が音調を担うことはできず、1モーラ長の1拍名詞短形と同じく単独言い切り形では型の対立が現れない。

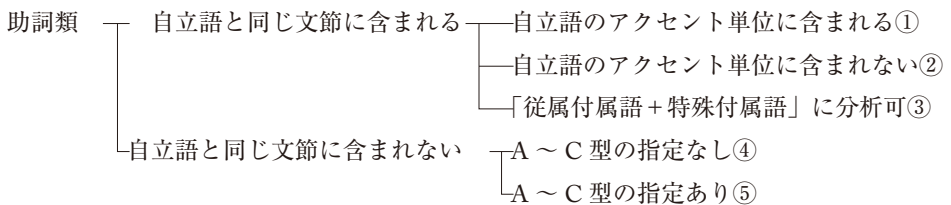
母音連続 *ai*, *oi*, *ui* は基本的に1音節にまとまるが、語によっては2音節に分かれる発音も可能である（1音節扱い：[ハイ。ハイ[ガ]…「灰が」／2音節扱い：ハ[イ。[ハ]イガ…「灰が」）。どのような場合に必ず1音節にまとまるのか、あるいは2音節に分かれるのかについては依然不明な部分が多く、今後の調査課題である。

なお *ai*, *oi*, *ui* 以外の母音連続 (*au*, *ae*, *oe* 等) は2音節に分かれる ([ワ]ラ[ウ「笑う」, [ナ]マ[エ「名前」いずれも3音節A型語)。

3.5 付属語の分類⁸

安島方言の助詞・助動詞・形式名詞（以下、助詞類）の多くは、既出の「ガ」や「ヨリ」などのように、固有のアクセントを持たず直前の自立語と同じアクセント単位（＝アクセントが付与され実現する領域）に組み込まれる振舞いを見せる。このような助詞類を本稿では「従属付属語」と呼ぶ。一方で、直前の自立語と同じ文節に含まれながらも同じアクセント単位には組み込まれないという、従属付属語と自立語の中間的な韻律的独立性を持つと解釈される付属語が存在し、これを「特殊付属語」と呼ぶ（音韻論的な解釈の詳細は4.2で述べる）。さらに、これら2種の付属語の連続（従属付属語＋特殊付属語）と解釈できるタイプの付属語が存在し、これを「複合付属語」と呼ぶ。大きく分けたこの3種のうちいずれの付属語が接続するかによって、文節全体での音調や型の中和パターンが大きく変わるのであるが、それを記述することが本節の主題となる。この他、直前の自立語と同じ文節に含まれないと考えられるもの、自立語と同等の振舞いを見せるものと合わせて、安島方言の助詞類は(16)のように5種に分類できる。

(16) 助詞類の分類



(①従属付属語, ②特殊付属語, ③複合付属語, ④独立付属語, ⑤自立語と同等)

3.5.1 従属付属語

その振舞いは前節までも示された通り、それ自体固有のアクセントを持たず「文節性」を示す助詞・助動詞であり、少なくともアクセントに関しては韻律的な独立性を持たない接辞的な振

⁸ 本稿での「付属語」とは、自立語のアクセント単位に組み込まれる、A, B, Cの型の指定を欠いているなどの自立語にはない韻律的な従属性・不完全性を示す助詞・助動詞・形式名詞等を指す。一般に接辞と考えられるものは含まない。

舞いを示す。以下、従属付属語の語例を (17) にまとめるとともに 1～4 音節名詞に助詞「ナラ」を付した例を (18) に示す。従属付属語とその直前の語の境界を (-) で表す。

(17) 従属付属語の語例一覧

- 1σ オ, ガ, デ, ト, ニ, ノ, モ, ワ 《以上格助詞または副助詞「を, が, で, と, に, の, も, は」》, カ 《疑問の終助詞》, デ 《終助詞》, デ 《理由の接続助詞》, ト 《引用》, ヤ 《指定の助動詞》, ワ 《終助詞》, ン・ノ⁹ 《準体助詞》
- 2σ カラ, グライ, コソ, ゴト, サエ, シカ, ダケ¹⁰, デモ, ナラ, マデ, ヨリ
- 3σ ダラケ

(18) 1～4 音節名詞+従属付属語「ナラ」(言い切り形) 【対立・中和パターン: A/B/C】

	1σ1μ	2σ	3σ	4σ
A	[カ]-ナ[ラ]	ニ[ワ]-ナ[ラ]	サ[カナ]-ナ[ラ]	ニ[ワトリ]-ナ[ラ]
B	ハ-[ナ]ラ	ヤ[マ-ナ]ラ	コ[コロ-ナ]ラ	ア[サガオ-ナ]ラ
C	メ-[ナ]ラ	マ[ド-ナ]ラ	ハ[タケ-ナ]ラ	ア[マザケ-ナ]ラ

従属付属語(のみ)を含む文節全体の音調は同じ音節数の自立語と同じ音調となり(「系列化」), 基本的に型の対立の中和は生じない(ただし 3.3.1 でも述べた通り接続形では B, C 型の対立が紛れる傾向がある)。

3.5.2 特殊付属語

特殊付属語の語例を (19) にまとめた後, まず (20) に 1～4 音節名詞に例示の副助詞「ドマ」を続けた文節の音調を示す。特殊付属語とその直前の語の境界を (=) で表す。

(19) 特殊付属語の語例一覧

- 2σ ケド, コト 《事》, サケ・サカイ 《理由の接続助詞》, ダケ¹¹, タメ 《為》, トキ 《時》, ドマ 《例示の副助詞「など, なんか」》, ナンカ 《左に同じ》, ホド 《程》, ミタイ 《比況・推定の助動詞「みたい(な)」》, ワケ 《訳》, (ン)タナ¹² 《ミタイの方言形》

(20) 1～4 音節名詞+特殊付属語「ドマ」【対立・中和パターン: ABC, AB/C, A/B/C】

	1σ1μ	1σ2μ (CVV)	2σ	3σ	4σ
A	[カ]=ドマ	[ハイ]=ドマ(灰)	ニ[ワ]=ドマ	[サ]カナ=ドマ	ニ[ワ]トリ=ドマ
B	[ハ]=ドマ	[カイ]=ドマ(貝)	ヤ[マ]=ドマ	コ[コロ]=ドマ	ア[サガオ]=ドマ
C	[メ]=ドマ	[ダイ]=ドマ(台)	[マ]ド=ドマ	ハ[タ]ケ=ドマ	ア[マザ]ケ=ドマ

⁹ ンは直前の母音と 1 つの音節にまとまる。例えば, ネ[ル「寝る (A 型)」+ンカ「のか」→[ネ]ルン[カ「寝るのか?」]。ルンで 1 音節にまとまり全体で 3 音節 A 型。

¹⁰ 名詞に接続する場合。動詞に接続する場合は特殊付属語として振舞う。

¹¹ 動詞に接続する場合。名詞に接続する場合は従属付属語として振舞う。

¹² 母音終わりの語にタナ, 撥音終わりの語にはタナが付く(例: ホン=タナ「本みたい」)。

従属付属語を続けた (18) とは文節全体の音調が大きく異なる。型の中和パターンも大きく変わり、自立語部分が1モーラであれば全ての型が中和し、1音節2モーラまたは2音節であればA、B型が中和し、3音節以上になると3つの型が全て対立する。

A、C型は自立語部分が接続形と同じ音調を取り¹³、付属語部分 (=ドマ) は低く続く。B型は自立語内部に下降を生じずドマが低く接する音調を取るようである。なお特殊付属語が続いた文節でもA、B型には上昇位置が後退したバリエーションが聴かれる (例: コ[コロ]ドマ~ココ[ロ]ドマ、ア[サガオ]ドマ~アサガ[オ]ドマ)。

次に、特殊付属語の後ろにさらに従属付属語が後続した文節の音調を見る。

(21) 2音節名詞+特殊付属語「ミタイ」(+ニ) 【対立・中和パターン: AB/C, A/B/C】

A ニ[ワ]=ミタイ ニ[ワ]=ミタイ-ニ (庭みたい(に))

B ヤ[マ]=ミタイ ヤ[マ=ミ]タイ-ニ (山みたい(に))

C [マ]ド=ミタイ [マ]ド=ミタイ-ニ (窓みたい(に))

ここで注目したい点は、ミタイに従属付属語「ニ」を続けた場合B型の下降位置が1音節後退する点である。A、C型文節の下降位置は、従属付属語が続いて文節全体の長さが増えても語頭から数えた位置に固定されて動かないが、B型文節の下降位置は、特殊付属語境界 (=) の位置にかかわらず、文節末から数えて3音節目の直後に固定されるようである。すなわちA、C型の下降とB型の下降はその実現領域を異にする。A、C型の下降はあくまでも特殊付属語を含まない自立語部分に実現するものである一方、B型の下降は自立語や付属語の長さに関わりなく、文節全体を1つの単位として付与されるものである。

(20)によれば、「1音節語+2音節特殊付属語」の環境においては、自立語部分が1モーラであれば全ての型の対立が中和し、連母音を含む重音節であれば中和パターンはAB/Cとなる。

(22)には自立語部分が促音を含む重音節である場合の音調を示す。

(22) 2音節動詞¹⁴+特殊付属語「サケ」(+ヤ)

【対立・中和パターン 音便形: ABC, AC/B, 非音便形: AB/C, A/B/C】

1σ2μ(音便形)

A [ネッ]=サケ [ネッ]=サケ-ヤ (寝るから(だ))

B [オッ]=サケ オッ=[サ]ケ-ヤ (居るから(だ))

C [ミッ]=サケ [ミッ]=サケ-ヤ (見るから(だ))

¹³ 例えば[サ]カナ…は3.2.2で記述した通り,[サ]カナ~[サカナにも実現する。その場合、ドマは低く続く([サカナ]ドマ)。

¹⁴ 動詞にも3つの型の対立が存在する(ただし1音節B型は未見)。各型の音調も各種付属語が付いた際の振舞いも名詞と同じ。以下に1~4音節動詞の語例を挙げる。なお「隠れる」はkafferuが本来の形。

	1σ	2σ	3σ	4σ				
A	[コー	ネ[ル	[ア]ガ[ル	キ[コ]エ[ル	(買う	寝る	上がる	聞こえる)
B	—	[オ!ル	サ[ガ!ル	ア[ツメ!ル	(居る	下がる	集める)
C	[オ]ー	[ミ]ル	ア[ル]ク	カ[クレ]ル	(会う	見る	歩く	隠れる)

2σ(非音便形)

A	ネ[ル]=サケ	ネ[ル]=サケ-ヤ	(寝るから(だ))
B	オ[ル]=サケ	オ[ル=サ]ケ-ヤ	(居るから(だ))
C	[ミ]ル=サケ	[ミ]ル=サケ-ヤ	(見るから(だ))

ルに終わる動詞に助詞「サケ」が続く場合、ネッサケ (<ネル+サケ) のようにルが促音便化する形としない形の両方が可能である。この音便の有無により自立語部分の音節構造が変わり、それに伴い各型の中和パターンも大きく変わる。非音便形の音調と中和パターンは (21) における「2音節語+ミタイ (ニ)」と一致し、「非音便形+サケ」では AB/C, 「非音便形+サケヤ」では A/B/C となる。促音便形になると自立語内部に下降位置の対立を実現させることができず、「音便形+サケ」では3つの型全ての対立が中和してしまう。「音便形+サケヤ」ではB型のみ下降が付属語部分に後退し、中和パターンは AC/B となる。

3.5.3 複合付属語

指定の助動詞「ヤ」の活用形ヤロ (だろう), ヤッタ (だった), ヤッタラ (だったら) は従属付属語とも特殊付属語とも一見異なる振舞いを見せる。まず (23) に1~4音節名詞に「ヤロ」を付した文節の音調を示す。自立語と複合付属語の境界を (-) で表す。

(23) 1~4音節名詞+複合付属語「ヤロ」【対立・中和パターン:A/BC】

	1σ	2σ	3σ	4σ
A	カ-[ヤ]ロ	[ニ]ワ-ヤロ	サ[カ]ナ-ヤロ	ニ[ワト]リ-ヤロ
B	[ハ]-ヤロ	ヤ[マ]-ヤロ	コ[コロ]-ヤロ	ア[サガオ]-ヤロ
C	[メ]-ヤロ	マ[ド]-ヤロ	ハ[タケ]-ヤロ	ア[マザケ]-ヤロ

A, C型に関しては、「名詞+ヤ」までの部分で各型の接続形の音調が実現し残る「ロ」は低く続く。つまりカ-[ヤ]ロ, [ニ]ワ-ヤロ (A型) あるいは[メ]-ヤロ, マ[ド]-ヤロ (C型) 等の「名詞+ヤ」の部分は「名詞+1音節従属付属語」に等しい音調を取る (ただし3音節以上のA型に聴かれる[○]○[○], ○[○]○[○]等の重起伏調は言い切り形にのみ現れるバリエーションであるため (3.2.2参照), ここでは*[ニ]ワ-[ヤ]ロのような音調は聴かれない)。一方B型は特殊付属語を続けた文節と同じ音調となる (cf. (20))。型の中和パターンは自立語の長さにかかわらず A/BC となる。

次に、これらに疑問の終助詞「カ」を続けた文節の音調を示す。

(24) 1～4音節名詞＋複合付属語「ヤロ」＋従属付属語「カ」

【対立・中和パターン：AB/C, A/B/C】

	1σ	2σ	3σ	4σ
A	カ-[ヤ]ロ-カ	[ニ]ワ-ヤロ-カ	サ[カ]ナ-ヤロ-カ	ニ[ワト]リ-ヤロ-カ
B	ハ-[ヤ]ロ-カ	ヤ[マ-ヤ]ロ-カ	コ[コロ-ヤ]ロ-カ	ア[サガオ-ヤ]ロ-カ
C	[メ]-ヤロ-カ	マ[ド]-ヤロ-カ	ハ[タケ]-ヤロ-カ	ア[マザケ]-ヤロ-カ

たった1つの助詞の添加が中和パターンを大きく変え、1音節語の場合 AB/C となり、2音節以上の語の場合 3型全て対立する。「カ」の添加前 (23) と比べると、A, C 型の下降が語頭から数えた位置に固定されて動いていない一方、B 型の下降は1音節後退し、結果として B 型の下降位置が (23) (24) を通して文節末から数えた3音節目の直後に一貫している。このような各型の一連の特徴は前項の特殊付属語と共通するもので、実際、(20) と (24) を比べると文節長が同じであれば各型ともに文節全体で同じ音調となり (例:[サ]カナドマ=[ニ]ワヤロカ, コ[コロ]ドマ=ヤ[マヤ]ロカ, ハ[タケ]ドマ=マ[ド]ヤロカ), ロ+カがあたかも2音節の特殊付属語であるかのように振舞う。

よって複合付属語は、語幹部分「ヤ」だけが1音節の従属付属語として自立語のアクセント単位に組み込まれ、残る活用語尾～ロ, ～(ッ)タ, ～(ッ)タラが韻律的に独立し特殊付属語と同じく振舞う(「従属付属語+特殊付属語」に分解できる)と解釈することができる。

また、(25) に示す通り、自立語のアクセント単位に組み込まれる付属語が本稿で言う「従属付属語」、組み込まれないものが「特殊付属語」であるとすれば、複合付属語は、自立語のアクセント単位に一部分のみ組み込まれる付属語という解釈・分類も可能であろう。

(25) 付属語の種類と自立語のアクセント単位の拡張範囲 (○○○…自立語部分, ▽▽…付属語部分)

【従属付属語】{○○○▽▽}_{AU} 例:{サカナナラ}【複合付属語】{○○○▽}_{AU}▽ 例:{サカナヤ}ロ【特殊付属語】{○○○}_{AU}▽▽ 例:{サカナ}ドマ({ }_{AU} は自立語のアクセント単位を表す)

このように付属語内部にアクセント単位の境界が走るという特殊な付属語の例は、二型アクセント体系を有する鹿児島市方言にも存在する。様態を表す「～ンゴチャッ」(～のようだ)は、ゴとチャッの間にアクセント単位の境界(・)が走ると解釈できる振舞いを示すという。

(26) 鹿児島市方言における「2音節名詞＋ンゴチャッ」の音調 (木部 2012: 81)

A ハ[ナン]ゴ・チャッ (鼻のようだ)

B ハナン[ゴ・]チャッ (花のようだ)

「～ゴ」までで名詞の音調が実現し「チャッ」の部分が独立するのは、木部 (2012: 81) によれば

「ゴチャッ」の語源「如くある」の「ある」がアクセント的に独立しているためである」という。安島方言の「ヤロ」「ヤッタ」等もまた語源に「ある」を含んでおり（ヤッタ<ジャッタ<デ+アッタ）、鹿児島市方言の「ゴチャッ」と同様、「ヤ」までが名詞のアクセント単位に組み込まれる一方「ある」由来の活用部分が韻律的な独立性を保っているのだと考えられる。

なお「～ヤッタラ」は (24) 「～ヤロカ」と同じ音調・中和パターンとなる。活用語尾「タラ」があたかも 2 音節の特殊付属語であるかのように振舞う。

(27) 1～3 音節名詞＋複合付属語「ヤッタラ」【対立・中和パターン：AB/C, A/B/C】

	1σ	2σ	3σ
A	カ-[ヤッ]タラ	[ニ]ワ-ヤッタラ	サ[カ]ナ-ヤッタラ
B	ハ-[ヤッ]タラ	ヤ[マ-ヤッ]タラ	コ[コロ-ヤッ]タラ
C	[メ]-ヤッタラ	マ[ド]-ヤッタラ	ハ[タケ]-ヤッタラ

3.5.4 独立付属語と自立語相当の助詞類

独立付属語は、直前の語と同じ文節には含まれず直前の自立語の音調にも影響を与えない、かつそれ自身は固有のアクセント型を持たないものである¹⁵。引用の「ッテ」の他、終助詞「ナ」「ゾ」等がこれに属する。

(28) 2 音節名詞＋独立付属語「ッテ」

- A ヒ[マ] ッテ… (暇って(聞いた))
- B [ユ!キ ッテ… (雪って(聞いた))
- C [ア]メ ッテ… (雨って(聞いた))

自立語相当の助詞類は、それ自身が固有のアクセント型を持ち、かつ直前の自立語からは独立してそれ自身 1 つの文節を形成するものである。アクセント上の振舞いは全く自立語と同等である。助詞「バツカリ¹⁶ (B 型)」や形式名詞「ツモリ (A 型)」「トコロ (A 型)」がこれに属する。

(29) 2 音節動詞＋「ツモリ (A 型)」＋「カ」

- A ネ[ル] ツモリ[カ] (寝るつもりか)
- B [オ!ル ツモリ[カ] (居るつもりか)
- C [ミ]ル ツモリ[カ] (見るつもりか)

動詞部分で A, B, C 各型の音調が実現した後に、「ツモリカ」全体で 4 音節 A 型の音調が実現

¹⁵ 語形が短く、なおかつ終助詞は文末位置にあって様々なイントネーションが被さり様々なピッチパターンで実現するために、付属語固有の型の特定は困難である。

¹⁶ 強意・限定の意を表すバツカリ《ばかり》の類の助詞は全国各地の多くの N 型方言に共通して自立語に相当する振舞いを示すようである。同じ福井県内のあわら市北湯方言のバツカリ（松倉 2016: 33）をはじめ、隠岐島方言の《ばかり》の類（上野 2012a: 48）、長崎市方言のバツカイと熊本県天草市本渡方言のバツカリ（木部 2012: 91）、喜界島湾方言の /beeri/（上野 2012b: 57）など。

している。2つの自立語（文節）の単独形の音調を単に並置したものにほぼ等しい。

独立付属語と自立語相当の助詞類は、当然直前の自立語のアクセント単位には含まれないという点で先述の特殊付属語と共通するが、B型語に付いた場合の振舞いに特殊付属語との大きな相違が見られる。

3.6 各型の音声的なバリエーション及び付属語の振舞いのまとめ

3.6.1 各型の音調

3.1 から 3.4 にわたって記述した A, B, C 各型の音声的なバリエーションを (30) にまとめ、特に各型の音韻論的な解釈を考察する上で注目すべき諸特徴を改めて整理する。

(30) 2～5音節語の音声的なバリエーション

	2σ	3σ	4σ	5σ
A	○[○]	[○]○[○～ [○!○○～ [○]○○～ [○○○	○[○]○[○～○[○!○○～ ○[○]○○～○[○○○	○[○○]○[○～○○[○]○[○～ ○[○○!○○～○○[○!○○～ ○[○○]○○～○○[○]○○
B	[○!○～ [○]○	○[○!○～ ○[○]○	○[○○!○～○○[○!○～ ○[○○]○～○○[○]○	○[○○○!○～○○○[○!○～ ○[○○○]○～○○○[○]○
C	[○]○～ [○○]	○[○]○～ ○[○○]	○[○○]○～ ○[○○○]	○[○○○]○

A型に最も特徴的な音調は、3音節以上の語・文節の末尾3音節に現れるHLHの音調であろう。末尾音節と前次末音節の2か所に現れるこの2つのHをそれぞれ音韻論的にどのように解釈するかによって体系全体の解釈もまた大きく変わる重要な特徴である。なお末尾3音節以内に聴かれる様々なバリエーション(HLH～HMM～HLL～HHH)は、全てHLHから音声的なレベルで随意に生じる異音とみなし、あくまでも末尾3音節の音韻的な表示はHLHであると考え(3.2.2も参照)。2音節の語・文節には基本的に1つ目のHが結びつく音節(tone-bearing unit)がなくLHの音調を取る。また2音節A型には後続する語が低く付く性質(あるいは次の音節を下げる「下げ核¹⁷」的な作用)がある点にも改めて注目したい(3.2.1参照)。

B型に特徴的な点は、やはり末尾音節の中音調(C型とは異なる独特の下降パターン)であるが、特殊付属語・複合付属語が続いた場合にはこの特徴的な中音調が現れず、文節全体として前次末音節の直後に下降が生じるA型に似た音調(-3型)になる(3.5.2, 3.5.3参照)。

A, B型に共通する特徴としては、ピッチの上昇位置が語頭付近に固定されず下降の直前まで

¹⁷ 次の拍の高さを下げる力を持つアクセント核の一種(上野1992: 11)。ここに言う拍とはアクセント上の長さを構成する単位であるが、安島方言の場合音節にあたる。

後退する傾向（4音節 B 型： $\circ[\circ\circ! \circ \sim \circ[\circ\circ]\circ \sim \circ\circ[\circ! \circ \sim \circ\circ[\circ]\circ]$ ）がある（3.2.3, 3.3.2 参照）。一方 C 型では基本的に上昇の後退が生じず上昇位置が語頭付近に固定される。

C 型に時折生じる末尾音節内部への下降の遅れ（ $[\circ\circ]$, $\circ[\circ\circ]$ ）は音声的なレベルでの揺れの範囲内と考えられるが、なぜこのような下降位置の揺れが C 型には生じて A, B 型には生じないのかという問題が残る。

3.6.2 付属語の種類別 音調と中和パターン

3.5 で取り上げた 5 種の助詞類のうち、従属付属語、特殊付属語、複合付属語の 3 種の付属語を 1～4 音節名詞に付した文節の音調を一覧する（(18) (20) (23) (24) の再掲）。

(31) 1～4 音節名詞 + 「ナラ／ドマ／ヤロ／ヤロカ」の音調（言い切り形）

	+ナラ（従属）	+ドマ（特殊）	+ヤロ（複合）	+ヤロカ（複合+従属）
A	[カ]ナ[ラ	[カ]ドマ	カ[ヤ]ロ	カ[ヤ]ロカ
	ニ[ワ]ナ[ラ	ニ[ワ]ドマ	[ニ]ワヤロ	[ニ]ワヤロカ
	サ[カナ]ナ[ラ	[サ]カナドマ	サ[カ]ナヤロ	サ[カ]ナヤロカ
	ニ[ワトリ]ナ[ラ	ニ[ワ]トリドマ	ニ[ワト]リヤロ	ニ[ワト]リヤロカ
B	ハ[ナ!ラ	[ハ]ドマ	[ハ]ヤロ	ハ[ヤ]ロカ
	ヤ[マナ!ラ	ヤ[マ]ドマ	ヤ[マ]ヤロ	ヤ[マヤ]ロカ
	コ[コロナ!ラ	コ[コロ]ドマ	コ[コロ]ヤロ	コ[コロヤ]ロカ
	ア[サガオナ!ラ	ア[サガオ]ドマ	ア[サガオ]ヤロ	ア[サガオヤ]ロカ
C	メ[ナ]ラ	[メ]ドマ	[メ]ヤロ	[メ]ヤロカ
	マ[ドナ]ラ	[マ]ドドマ	マ[ド]ヤロ	マ[ド]ヤロカ
	ハ[タケナ]ラ	ハ[タ]ケドマ	ハ[タケ]ヤロ	ハ[タケ]ヤロカ
	ア[マザケナ]ラ	ア[マザ]ケドマ	ア[マザケ]ヤロ	ア[マザケ]ヤロカ

いずれの付属語が付くかにより名詞のアクセント単位の拡張範囲が変わり、A, C 型ではそれに応じて高音調の分布も大きく変わる。対して B 型は特殊付属語と複合付属語が付いた文節における下降位置が -3 型に一貫していることがわかる。

付属語の種類別に加え、自立語の音節数・音節構造に応じて変わる文節全体での型の中和パターンを整理すると (32) のようになる。

(32) 付属語の種類別型の対立・中和パターン

自立語の長さ・構造→ ↓ 付属語の種類・長さ	1σ1μ 1σ2μ*	1σ2μ**	2σ	3σ～	
+ 従属	A/B/C				(例：ナラ (18))
+ 特殊	ABC	AB/C	A/B/C		(例：ドマ (20))
+ 特殊 + 従属	AC/B	A/B/C			(例：サケ-ヤ (22))
+ 2σ 複合	A/BC				(例：ヤロ (23))
+ 2σ 複合 + 従属 + 3σ 複合	AB/C		A/B/C		(例：ヤロ-カ (24)) (例：ヤッタラ (27))

* 促音を含む重音節

** 長母音, 二重母音, 撥音を含む重音節

(32)には3つの型の対立・中和パターンが論理上取りうる全ての組み合わせ(ABC, A/BC, AB/C, AC/B, A/B/C)が含まれ, 付属語の種類・長さ, 自立語部分の長さ・音節構造といった様々な条件が関わり中和パターンが複雑に交替することがわかる。

一見してこれほど複雑な様相を呈する各型の音調や各種付属語の振舞いを, どのような音韻論的解釈の下, どれほど簡潔に説明することができるか, が次節の主題である。

4. 解釈

本節では, 3節で一覧した各型の音調と各種付属語の振舞いを踏まえ, 体系全体の音韻論的な解釈を試みたい。まず結論を最初に示し, その結論に基づくと3節に述べた各型の複雑な音調がどのように解釈されるのかを確認していく流れで記述する。

4.1 A, B, C各型の音韻論的解釈

安島方言の三型アクセントは, 音韻論的には文節全体に被さる2つの式音調と下げ核¹⁸の有無及び位置が対立する体系であると解釈する。

最初にまずC型を取り上げると, C型は本稿で「平進式」と呼ぶ式音調と併せてアクセント単位の次末音節に下げ核を持つ型である。「平進式」は語頭1音節目あるいは2音節目から核がある音節まで高めの平らな音調が続くピッチ形を持つ¹⁹。

(33) 平進式による音調付与 (□は下げ核を表す)

C型	○□	○□○	○○□○	○○○□○	○○○○□○
				/	/
	LH	LH	L H	L H	L H
実現型:	[○~[○]]	[○]○	○[○]○	○[○○]○	○[○○○]○

¹⁸ 脚注17参照。

¹⁹ 3音節以上のC型の語頭音節に現れる低は, 語に備わる特徴(式音調の特徴)ではなく句頭の音調の現れとして解釈できる可能性もある。

末尾音節の直前あるいは内部の下降は下げ核の作用による。[メ]ー「芽」,[ダ]イ「台」など2モーラ長の1音節語には音節内下降が生じる。

A, B型は本稿で「昇降式」と呼称する式音調を持つ。「昇降式」は、核の置かれる音節の直前の音節(核がなければ末尾音節)までにLHLの音調(ピッチの上昇と下降)が現れるピッチ形を持つ。このLHLに続き、核のある音節にはさらにHが付与される(核がなければ末尾音節にHが付与される)。つまり式音調全体としてはLHLHのメロディーを持つ²⁰。下げ核に関しては、A型が末尾音節に核を持つ型²¹、B型が核を持たない無核型である。

(34) 昇降式による音調付与(∩は下げ核を表す)

A 型	○∩	○○∩	○○○∩	○○○○∩	○○○○○∩
	∩	∩∩	∩∩∩	∩∩∩∩	∩∩∩∩∩
	LHLH	LHLH	LHLH	LHLH	LHLH
実現型:	[○	○[○	[○]○[○	○[○]○[○	○○[○]○[○~
					○[○○]○[○
B 型	○	○○	○○○	○○○○	○○○○○
	∩	∩∩	∩∩∩	∩∩∩∩	∩∩∩∩∩
	LHLH	LHLH	LHLH	LHLH	LHLH
実現型:	[○	[○!○	○[○!○	○[○○!○~	○[○○○!○~
			○○[○!○	○○○[○!○	

昇降式の音調LHLH(左から順にL1, H1, L2, H2と呼ぶ)のうち、L2がA型では次末音節(1音節語の場合末尾音節)に結びつき、B型では末尾音節に結びつく。L1とH1に関しては、語頭1音節目にL1が結びつき2音節目以降にH1が拡張する発音(例:○_{L1}[○○○_{H1}!○)と、1音節目からH1の直前までL1が拡張する発音(例:○○○_{L1}[○_{H1}!○)ともに可能である。

安島方言では上昇調の音節(音節内部の上昇)が許容されず、音韻的にLHが結びついた音節は音声的なレベルでHあるいはMのlevel toneに単純化される。1音節語の場合、R > H (R:

²⁰ [サ]カ[ナ, ニ[ワ]ト[リ]といった重起伏調を生じるという点で、岐阜県旧揖斐郡徳山村戸入方言(山口1984b, 上野1987)や石川県能登島別所方言(新田2005, 平子2015)に報告されるいわゆる「くぼみ式」に類似する音調ではないと思われる。くぼみ式とは、山口(1984b)から語例を引くと、[ヒ]ダ[リ, [カン]ザ[シ, [ムギ]バタ[ケ(3語とも無核語)のような重起伏調を生じる式音調である。戸入方言や島別所方言では1つ目のピッチの山が語頭1, 2拍目に固定されている点が安島方言と異なる(安島では1つ目のHが語頭に固定されるのではなく文節末から数えた位置に付与されている([サ]カ[ナ, ニ[ワ]ト[リ, モモ[バ]タ[ケ…(A型))。

²¹ なおA型を末尾音節に下げ核のある型と見る一番の拠り所は、2音節A型に「後続する語が低く付く性質(あるいは次の音節を下げる「下げ核」的な作用)」が認められることであるが、3音節以上のA型にはそのような性質・作用が基本的には観察されない。3.2.2で述べた通り、3音節の接続形[○]○○…、[○!○○…や[○○○…は文節末に下がり目を持たない。かつては3音節以上の接続形にも存在した文節末の下がり目が、おそらく下記のような重起伏調を解消する音調変化を経る間に消失してしまったものと考えられる。

**[○]○[○]… > *○!○○]… > [○!○○]… > [○○○]…
> *○]○○]… > [○]○○]…

共時的には3音節以上のA型の下げ核は表面上下げ核としての力をすでにほぼ失っているが、A型における式音調の付与の在り方や特殊付属語・複合付属語が後続した文節の音調を説明するためにも、また2音節A型の音韻表示との一貫性を保つためにも、音韻的にはそこに核があるとみなす必要がある。

Rising), H に続く R は HR > HM となる。

A 型の末尾 3 音節に結びつく HLH は、音声的なレベルでダウンドリフト (HLH > HLM, さらに進んで HLM > HLL) や H, M に挟まれた低音調 (L) の H, M への同化 (HLM > HMM あるいは HLH > HHH) を被る。結果として、3 音節以上の A 型は 3.2.2 や 3.6.1 で述べたようにとりわけ幅広い実現型のバリエーションを示す。

ここで一度各型の音韻論的な解釈をまとめる。

(35) 1～5 音節各型の音韻論的解釈 (∧ は昇降式, ˉ は平進式を表す)

	1σ	2σ	3σ	4σ	5σ
A(昇降式有核)	∧○ˉ]	∧○○ˉ]	∧○○○ˉ]	∧○○○○ˉ]	∧○○○○○ˉ]
B(昇降式無核)	∧○	∧○○	∧○○○	∧○○○○	∧○○○○○
C(平進式有核)	ˉ○ˉ]	ˉ○ˉ]○	ˉ○○ˉ]○	ˉ○○○ˉ]○	ˉ○○○○ˉ]○

1つの語彙が式音調と核の指定を両方持つと解釈される訳であるが、式の違いだけで対立する型はなく、式の指定は型の区別にとり余剰的であるように見える。あるいはそもそも核を想定する必要があるのか—例えば C 型は次末音節の後に生じる下降も含めて全体で 1つの式音調 (語声調) と解釈できるのではないかと—とも思われる。しかし以下に述べる通り、やはり式と核 (トーンとアクセント) という 2つの弁別特徴を別々に立てることで、各型の表面上の音調に現れる様々な特徴を細部に至るまで体系的に説明することができると考える。

A, B 型 = 昇降式 / C 型 = 平進式という式の対立を想定することによって、A, B 型と C 型の間に観察されるピッチの上昇位置の違い (3.2.3, 3.3.2, 3.6.1 参照) が式音調の違いに起因するという解釈が与えられる。A, B 型には $\text{○}[\text{○○}!\text{○}] \sim \text{○○}[\text{○}!\text{○}]$ のような上昇位置の後退が生じる一方 C 型には基本的にこのような遅れが生じないのは、C 型の式音調 (平進式) の特徴に因る。さらに、A, B 型と C 型の相違点に加えて、A 型の末尾 3 音節の重起伏調 (HLH) と B 型の末尾 2 音節の小さな下降 (HM) が実は同じ式音調 (LHLH) の実現であるという A 型と B 型の共通点もまた明かされる。

A, C 型 = 有核 / B 型 = 無核という対立は、特殊付属語や複合付属語を含む文節における A, C 型と B 型の振舞いの違いに対応する (詳細は 4.2 で後述)。

また C 型を有核型とみなすことにより、C 型に見られる末尾音節内部への下降の遅れ ($[\text{○○}]$, $\text{○}[\text{○○}]$) を、「核による下降特有の性質」と解釈できる。次末音節に付与される下げ核は、その直後にピッチの下降を生じさせるという動的な力 (のみ) を持つものであって、次の音節が H, M, L どの高さで実現するかといった段階的・静的な音調の指定は何ら含意しない。そのため、音節間でピッチが下がりきる $\text{○}[\text{○}]$ や $\text{○}[\text{○}]$ だけでなく、下降が次の音節内部にずれ込む $[\text{○○}]$ や $\text{○}[\text{○○}]$ もまた全く適格な C 型の実現型である。一方で A, B 型に聴かれる下降は、核による「ピッチの変動」ではなく、式音調により静的に指定された「高音調 (H) と低音調 (L) の連続」であるため、A, B 型には C 型のような下降の遅れが生じない (例えば B 型は $[\text{○○}]$, $\text{○}[\text{○○}]$) といったバリエーションを持たない。3.3.1, 3.6.1 参照)。

4.2 特殊付属語・複合付属語の音韻論的解釈

4.1 で述べた各型の音韻論的解釈に基づくと、3.5.2, 3.5.3 で述べた特殊付属語・複合付属語の特殊な振舞いは以下のように解釈される。まず特殊付属語「ドマ」「ミタイ」が付いた文節の音調を再掲する。

(20) (再掲) 1～4 音節名詞+特殊付属語「ドマ」

	1σ1μ	1σ2μ (CVV)	2σ	3σ	4σ
A	[カ]=ドマ	[ハイ]=ドマ (灰)	ニ[ワ]=ドマ	[サ]カナ=ドマ	ニ[ワ]トリ=ドマ
B	[ハ]=ドマ	[カイ]=ドマ (貝)	ヤ[マ]=ドマ	コ[コロ]=ドマ	ア[サガオ]=ドマ
C	[メ]=ドマ	[ダ]イ=ドマ (台)	[マ]ド=ドマ	ハ[タ]ケ=ドマ	ア[マザ]ケ=ドマ

(21) (再掲) 2 音節名詞+特殊付属語「ミタイ」(+ニ)

	2σ		
A	ニ[ワ]=ミタイ	ニ[ワ]=ミタイ-ニ	(庭みたい(に))
B	ヤ[マ]=ミタイ	ヤ[マ=ミ]タイ-ニ	(山みたい(に))
C	[マ]ド=ミタイ	[マ]ド=ミタイ-ニ	(窓みたい(に))

A, C 型に特殊付属語が付いた場合は、付属語を含まない自立語部分に各型の接続形の音調が実現する。一方、B 型に特殊付属語が付いた場合には特殊な振舞いを示し、自立語や付属語の長さに関わりなく、文節末から数えた 3 音節目の直後に下降が生じる音調を取る。つまり A, C 型の下降が自立語側に固定されるのに対して、B 型の下降は付属語側に固定されており、「B 型+特殊付属語」に生じるこの下降は付属語が持つ特徴の現れではないかと推測される。そこで本稿では、A, C 型の音調が自立語側の式と核の実現である一方、B 型の音調は自立語側の式と付属語側の核の組み合わせの実現であると解釈する。音韻的に、特殊付属語と複合付属語、及びそれらに従属付属語が後続した付属語連続は、その末尾音節に核を有するいわば有核の付属語と解釈される(例：ドマ], ミタイ], ミタイ-ニ])。そして付属語側の核は、自立語が有核である場合(すなわち A 型か C 型である場合)消去され、自立語が無核である場合(B 型である場合)にのみ保存される²²。

(36) 付属語のアクセントの保存と消去 (2 音節名詞+ドマを例に)

A型	^ニワ]	+	ドマ]	→	^ニワ]ドマ
B型	^ヤマ	+	ドマ]	→	^ヤマドマ]
C型	マ]ド	+	ドマ]	→	マ]ドドマ

²² 二型アクセント体系を有する喜界島上嘉鉄方言(上野 2012b)にも、無核語に付いた際にのみ自らの核を実現させる性質を持つ付属語(助詞/Kara/と/madi/)が存在する。上野(2012b)によれば、上嘉鉄方言において区別される 2 つの型(α 系列と β 系列)はそれぞれ α 系列=無核型、β 系列=単語の次末拍に昇り核のある型と解釈される。そして/[Kara/と/[madi/(カラとマデ)はその 1 拍目に昇り核(↑)を持つ有核の助詞で、無核型の α 系列に付いた場合は、「あたかも、/midu[Kara/,/taTami[madi/ という「文節」が β 系列の「単語」に相当する形になる」(上野 2012b: 62)。一方、有核型の β 系列に付いた場合には助詞/Kara/と/madi/の持つ核は、直前の自立語の昇り核に消される形で実現しない(/ha[Tana+/[Kara/ > /ha[TanaKara/)。

なおこのように無核語に接続する場合のみ付属語の核が生かされるという現象自体は、文節内部²³におけるアクセント核に関する OCP 制約（「同一の韻律単位（＝文節）内部に有核の語が隣接してはならない」）等を想定することにより説明されうる。

以上の解釈に基づくと (20) (21) はそれぞれ (37) (38) のような音韻表示を持つ。

(37) (20)の音韻論的解釈

	1σ1μ	1σ2μ (CVV)	2σ	3σ	4σ
A	^カ] = ドマ	^ハイ] = ドマ	^ニワ] = ドマ	^サカナ] = ドマ	^ニワトリ] = ドマ
B	^ハ = ドマ]	^カイ = ドマ]	^ヤマ = ドマ]	^ココロ = ドマ]	^アサガオ = ドマ]
C	ˉメ] = ドマ	ˉダイ] = ドマ	ˉマ]ド = ドマ	ˉハタ]ケ = ドマ	ˉアマザ]ケ = ドマ

(38) (21)の音韻論的解釈

	2σ		
A	^ニワ] = ミタイ	^ニワ] = ミタイ-ニ	(庭みたい(に))
B	^ヤマ = ミタイ]	^ヤマ = ミタイ-ニ]	(山みたい(に))
C	ˉマ]ド = ミタイ	ˉマ]ド = ミタイ-ニ	(窓みたい(に))

3音節名詞+ドマを例に、上記の音韻的な型から実現型を派生する過程を示す。

(39) 「3音節名詞+ドマ」における音調付与

音韻型:	^サカナ]ドマ	^ココロ]ドマ]	ˉハタ]ケドマ
		\\N	
	LH LH	LHLH	LH
実現型:	[サ]カナドマ～	コ[コロ]ドマ～	ハ[タ]ケドマ
	[サカナ]ドマ	ココ[ロ]ドマ	

3音節 A 型+ドマには自立語部分（サカナ…）に HLH が付与されるが、その自立語部分は直後にドマが続く接続形の環境にあるためその実現型は[サ]カナ…や[サカナ…となる（3.2.2 参照）。[サカナ]ドマにおける自立語と付属語の境界に生じる下降は、自立語末尾の下げ核の実現と考えられる²⁴。

3音節 B 型+ドマは、B 型語の式音調（昇降式）と付属語の核（ドマ]）が組み合わせる結果、文節全体としては5音節 A 型語の音韻表示（例：^サカナナラ]）にほぼ等しくなる。そのため、文節末から数えて3音節目の後ろに下降が生じる点など、表面上の音調も5音節 A 型に類似する（例：コ[コロ]ドマ≒サ[カナ]ナラ）。しかし表面上の音調の現れ方には若干異なる点もある。

²³ 正確には、ほぼ文節に一致することが多い何らかの韻律単位の内部。ここでは仮に文節としておく。prosodic projection theory (Ito & Mester 2007 等) の枠組みで言えば minimal prosodic phrase に相当するか。安島方言における語以上のレベルの韻律構造に関する理論的な考察は今後の課題である。

²⁴ 3.2.2, 4.1 で触れた通り、A 型の接続形[○○○…は、[ニワガア]ルのように、文節間の下がり目を失っている。しかし、[サカナ]ドマのように特殊付属語が後続した場合には一すなわち文節内部では一下がり目を残す。

3音節以上のA型には、末尾音節にかけて上昇が生じる重起伏調（例：サ[カナ]ナ[ラ]）がバリエーションとして聴かれるが、B型語＋特殊付属語にはそのようなバリエーションがほとんど聴かれない。この差の由来はおそらく、両者の韻律構造の違いに求めることができる。(40)に示す通り、ココロドマとサカナナラは確かに文節単位で見れば式の種類と核の位置が一致するものの、文節内部の韻律構造は異なる。

(40) ココロドマとサカナナラの韻律構造と実現型 (()_W は韻律語, { }_{Ph} は文節を表す)

	韻律構造	実現型
3音節B型＋ドマ:	{(ココロ) _W (ドマ) _W } _{Ph}	コ[コロ]ド [↓] マ ^(↑: H-tone suppression)
5音節A型:	{(サカナナラ) _W } _{Ph}	サ[カナ]ナ[ラ]

ここでの韻律語とは、安島方言において音節と文節の間に位置すると想定される韻律的単位を指す。アクセント核が付与される単位に相当し、「自立語（＋従属付属語）」や「特殊・複合付属語（＋従属付属語）」が1つの韻律語を形成する。サカナナラ（3音節A型＋2音節従属付属語）は韻律的に見て全体として1語（1つの韻律語）にまとまっているが、ココロドマ（3音節B型＋2音節特殊付属語）はあくまでも2語（2つの韻律語）に分かれている。この点を踏まえた上で、「自立語を含まない韻律語あるいは文節頭のない韻律語に含まれるHが抑圧される」規則（ここではH-tone suppressionと呼ぶ）を想定することにより、特殊付属語部分にピッチの上昇が聴かれない理由が説明されうる。

なお複合付属語もまた特殊付属語と同じくその末尾音節に核を持つ付属語（ヤロ_W, ヤロ-カ_W, ヤッタラ_W）と解釈される。3.5.3で述べた通り、A, C型の自立語側のアクセント単位が付属語の一部「～ヤ」を組み込む点のみ、特殊付属語と異なる。

(23) (再掲) 1～4音節名詞＋複合付属語「ヤロ」

	1σ	2σ	3σ	4σ
A	カ-[ヤ]ロ	[ニ]ワ-ヤロ	サ[カ]ナ-ヤロ	ニ[ワト]リ-ヤロ
B	[ハ]-ヤロ	ヤ[マ]-ヤロ	コ[コロ]-ヤロ	ア[サガオ]-ヤロ
C	[メ]-ヤロ	マ[ド]-ヤロ	ハ[タケ]-ヤロ	ア[マザケ]-ヤロ

(41) (23) の音韻論的解釈

	1σ	2σ	3σ	4σ
A	^カ-ヤ _W ロ	^ニワ-ヤ _W ロ	^サカナ-ヤ _W ロ	^ニワトリ-ヤ _W ロ
B	^^ハ-ヤロ _W	^^ヤマ-ヤロ _W	^^ココロ-ヤロ _W	^^アサガオ-ヤロ _W
C	^-メ _W -ヤロ	^-マド _W -ヤロ	^-ハタケ _W -ヤロ	^-アマザケ _W -ヤロ

5. まとめ

本稿ではまず、安島方言のアクセント体系の大きな特徴として、A, B, C各型の実現型の音声的なバリエーションの幅広さを示した。例えば3音節A型語「魚」は[サ]カナ～[サ!カナ～[サ

カナ～[サ]カ[ナといった様々な音調で実現する。またそれらのバリエーションの全てが単なる自由変異的なバリエーションに過ぎないわけではない。例えば3音節A型のバリエーション[○○○○は基本的に文頭に, [○]○[○は文末位置にのみ現れるといった条件異音的な分布が見られる。

次に, 3.5では安島方言の助詞類を5種に分類しそれぞれの振舞いを記述した。文節性を示す付属語(本稿の「従属付属語」)や自立語とは同じ文節に含まれないもの(「独立付属語」「自立語相当の助詞類」)の他, 特に特徴的な振舞いを示すのは, 本稿で「特殊付属語」「複合付属語」と呼ぶ付属語である。「従属付属語」が付いた場合とは文節全体での音調が大きく変わり, 付属語の種類・長さ, 自立語部分の長さ・音節構造といった様々な条件が関わり型の対立・中和パターンが複雑に交替する。これら2種の付属語は, 音韻論的には「自立語と同じ文節に組み込まれながらも自立語のアクセント単位(自立語と同じ韻律語)には含まれず, 「無核型の語に付いた場合のみ自らのアクセントを実現させる」と解釈される性質を持つ。日本全国のN型アクセント諸体系において, このような性質を持つ付属語はごく珍しく(管見の及ぶ限り唯一, 喜界島方言の/Kara//madi/が安島方言の「特殊付属語」とよく似た振舞いを示す。脚注22参照), N型アクセントにおける助詞等の付属語の振舞いに関する類型論・一般的特性を考える上で, 注目される。

最後に4節では, 安島方言のアクセント体系の音韻論的な解釈を提唱し, 自立語の長さや付属語の種類など様々な要因が絡み非常に複雑なバリエーションを見せる各型の音調が, 2種の式音調と下げ核の有無・位置の組み合わせとして解釈されうることを示した。しかしながら依然1つの仮説を示したままで対案の検討が十分でなく, より簡明な解釈が可能かどうか(あるいはなぜこの解釈が最も優れていると言えるか), 通時的な視点も取り入れるなど様々な観点に立ち, さらに詳しく論じる必要がある。

参考文献

- 平子達也 (2015) 「能登島諸方言におけるアクセントの変化—「語頭隆起」とその後—」『日本語の研究』11(1): 18-35.
- Ito, Junko and Armin Mester (2007) Prosodic adjunction in Japanese compounds. In: Yoichi Miyamoto and Masao Ochi (eds.) *Formal Approaches to Japanese Linguistics 4 (MIT Working Papers in Linguistics 55)*: 97-111.
- 木部暢子 (2012) 「西南部九州2型アクセントの特性の比較: 助詞・助動詞のアクセントを中心として」『音声研究』16(1): 80-92.
- 金田一春彦 (1975) 『日本の方言 アクセントの変遷とその実相』東京: 教育出版.
- 松倉昂平 (2014) 「福井県あわら市のアクセント分布」『東京大学言語学論集』35: 141-154.
- 松倉昂平 (2015) 「福井県あわら市北潟方言及び清滝方言のアクセント資料」『東京大学言語学論集』36: e9-e31.
- 松倉昂平 (2016) 「福井県あわら市北潟方言の音調交替」『音声研究』20(1): 26-34.
- 松倉昂平・新田哲夫 (2016) 「福井三型アクセントの共時的特性の対照」『音声研究』20(3): 81-94.
- 松森晶子 (1993) 「日本語アクセントの祖体系再建の試み: いわゆる「下降式アクセント」の成立に関する考察をもとにして」『言語研究』103: 37-91.
- 新田哲夫 (2005) 「アクセント論—能登島の「式」の変化を考える」『国文学 解釈と教材の研究』50(5): 34-43.
- 新田哲夫 (2011) 「福井県三国町安島方言における maffa 《枕》等の重子音について」『音声研究』15(1): 6-15.
- 新田哲夫 (2012) 「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16(1): 63-79.
- 佐藤亮一 (1983) 「福井市, および, その周辺地域のアクセント—調査法と型の区別の現れ方との関連を中心にして—」『国語学研究』23: 1-19.

- 佐藤亮一 (1988) 「福井市およびその周辺地域におけるアクセントの年齢差, 個人差, 調査法による差」『方言研究法の探索』(国立国語研究所報告 93) 123-219. 東京: 秀英出版.
- 上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布 (2)」『日本学士院紀要』42(1): 15-70.
- 上野善道 (1992) 「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-14.
- 上野善道 (2012a) 「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1): 44-62.
- 上野善道 (2012b) 「琉球喜界島方言のアクセント—中南部諸方言の名詞—」『言語研究』142: 45-76.
- 山口幸洋 (1984a) 「福井市郊外の二型アクセント」『方言研究年報』27: 207-229. 大阪: 和泉書院.
- 山口幸洋 (1984b) 「岐阜県徳山村戸入方言のアクセント」『日本方言研究会第 39 回研究発表会発表原稿集』58-66.

The Three-pattern Accent System of the Antoh Dialect of Fukui Prefecture: Accentual Behavior of Particles and Accent Neutralization

MATSUKURA Kohei

Doctoral Student, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo /
Project Collaborator, NINJAL

Abstract

The Antoh dialect in Sakai City, Fukui Prefecture, has a three-pattern accent system, in which words have one of the three lexical accent patterns, Types A, B, and C, regardless of their length. This paper first describes the pitch patterns of the three distinctive accent types, and then discusses the accentual behavior of particles, which can drastically change the surface pitch pattern of the content word to which they attach. The same particles also cause accent neutralization; for instance, the distinction between Types A and B is neutralized when the particle *doma* 'things like...' is attached to a disyllabic word and that between Types B and C is neutralized when *jaro* 'maybe' is attached. In contrast, phrases consisting of a disyllabic word followed by the particle *nara* 'as for' or 'if' retain the three-way distinction. Finally, this paper attempts to give a phonological explanation for the surface pitch realization of the three accent patterns, and proposes that the three patterns are phonologically distinguished by the type of tonal registers, which are lexical features deciding the direction of pitch movement up to the accented syllable, and the presence or absence of a lexically accented syllable after which pitch falls.

Key words: three-pattern accent, Antoh dialect, accent neutralization, accentual behavior of particles